

湘南慶育病院

症 例 概 要 患者：70代女性

病名：左視床出血

入院期間：2023年3月中旬～ 2023年4月下旬

【経過】

2014年5月に左視床出血。右片麻痺。2023年3月1月中旬にボツリヌス療法希望され地域包括ケア病棟入院。上下肢にボツリヌス投与され、集中的リハビリテーションが開始となった。

内 容

【症例紹介】

発症後入院前の生活は夫と二人暮らしで、夫が家事全般の役割を担っていた。症例は日常生活は自立できているが、右上下肢の麻痺によって時間を要していた。症例の役割は、夫と一緒に調理に携わり味付けなど調理の手伝いをする程度であった。その他は座ったままできる活動として、絵葉書や映画鑑賞をすることであった。入院時、歩行は見守りであったが、歩行の耐久性は低下し、歩行速度も低下しておりふらつきがあったため、転倒の危険性があり主に車椅子を利用していた。上肢機能については、重度感覚障害を呈し、物品操作時には強く握りすぎてしまうことや、握っている感覚がわからず物品を落としてしまうことも散見された。その為、発症してから7年間、麻痺手では食事、服の着替え、トイレでトイレットペーパー操作などが困難で、使用頻度が低下したまま日常生活で使用する事に不安を抱え、心理的にも困難感が高まっていた。そこで今回の入院中に下記の目標を設定した。①「麻痺手でお箸を持って、食事をする事」②「服の着替えに麻痺手を参加させる事」③「トイレットペーパーを麻痺手で引っ張る」ことを意思決定しリハビリテーションを開始した。

【症例の変化】

訓練中に、感覚障害の影響で物品を上手く掴むことができず、弾いてしまったり、落としたりと物品操作に困難さを伴った。医師の許可のもと、神経筋電気刺激（NMES）や装具療法を実施。また、感覚についても手指の感覚を振動刺激に変換して知覚できるデバイスやバイオフィードバックなど特異的な練習を実施した。その結果、介入から3週間経過した頃には徐々に肘や手の随意運動が拡大し、物品のつまみ離しが連続してできるようになった。ご本人からは「少しずつ物をつかんで離すことができうれしい」と感想が聞かれた。介入4週間経過後には、日常生活に即した訓練を開始。スプーン操作から自

助具箸へ段階付けし、更衣やトイレ動作について同様の練習をおこなった。その結果、自助具箸で食事が可能となり、服の着替えやトイレトイレットペーパーなども使用する事ができるようになった。ご本人からは「(麻痺した右)手をまったく使っていなかったので、正直何かができるようになるとはいままでは思えなかった。今回食事が食べれるようになってとても嬉しい。食事の味が全然違う!」との感想を得た。